世界が注目、憲法九条を守り、生かそう！

NO .67　2017. 2.14
島中学校区九条の会発行
連絡先　井川方
TEL・FAX　058-231-5293

島九条の会通信

戦争法廃止、共謀罪阻止、沖縄米軍基地拡張・新設阻止、トランプ政権・・・・

旧暦の正月も過ぎ、２月になってしまいましたが、「あけましておめでとうございます」。会員の皆さん、今年も日本国憲法を高く掲げて、剛直かつ柔軟に活動を進めましょう。安倍晋三氏は新年早々、憲法「改正」をしきりに口にします。さらにオリンピックをだしにして、市民を巻き込む「共謀罪」を法制化しようとしています。また、米国のトランプ大統領の日米関係の「見直し」発言に乗じて、軍事力強化・日米安保（軍事同盟）強化を示唆する発言も、安倍氏は繰り返しています。そういえばトランプ氏と安倍氏の発想・発言には繋がりを感じます。今年も気を抜けない１年になりそうです。

次回例会（第４３回）のお知らせ

「高江ー森が泣いている２」

米軍のヘリパッド建設が強行される沖縄・高江の森の中で、何が起きているのか。現地からの報告（見出しの題名のDVD）を見て、大阪からの派遣機動隊員の「土人」発言、基地反対運動リーダーの不当拘束、オスプレイ墜落事故に対する政府の米軍言いなり発表などなど、憲法が「適用されない」沖縄の現実と「安倍流安全保障」の本質とを考えます。

とき　3月5日（日）　午後1時３０分より（2時間ほど）

ところ　島公民館和室（島小学校体育館１階）

※　どなたでも参加できます。誘い合ってご参加ください。

※　参加費は無料です。（活動資金が枯渇しています。若干のカンパをお願いします。）

沖縄本島北部、やんばるの森。その森の中、米軍北部訓練場の内側で、ヘリパッド建設が強行されている。米軍北部訓練場は、日本政府が米軍に提供している施設で、米軍の管理下にあり、許可なく立ち入ると刑事特別法（刑特法）という日本の法律で、罰せられることになる。しかし、ヘリパッド建設に反対する人びとは森の中に入り、抵抗を続けている。

大手メディアの記者たちは、今、森の中には入らない。高江のたたかいをどう伝えるのか、私たちも悩んだ。しかし、市民の知る権利、表現の自由、報道の自由の方が、米軍を守る刑特法よりも優先すると考え、北部訓練場の内側を描くことにした。（中略）

１２月完成を目指し、１０００人の機動隊を張り付け、乱暴な工事を大急ぎですすめる日本府。なぜ、なのか。

日本政府は、南西諸島を最前線基地、軍事要塞化しようとしているのだ。

辺野古の新基地建設工事も再開し、奄美、宮古、石垣にミサイル基地の建設をすすめようとしている。高江は終わりではなく、始まりなのだ。

「沖縄を再び戦場にさせない」、「戦争はいやだ」ーーー県民たちの抵抗は今日も続いている。

（「高江−森が泣いている２」紹介文より）

「島９」１０周年 第４２回例会・鈴木瑞穂さん講演の報告は、揖斐川・大野 ９条の会の岡崎さんがしっかりまとめてくださいましたので、２枚目をご覧ください。

私のつぶやき(3)　「起立・拍手」　田中良

個人である私たちが、世話になった警察官や自衛隊員に感謝と賞賛（時には同情や哀悼）の気持ちで拍手することはある。

しかし、国会で３分の２を占める政権与党の議員が突如として議場で起立し、拍手した。しかも「総理である私が決める」と度々絶叫している首相の音頭で、自衛官や警察官や海上保安官に対して起立して拍手をおこなったことは見過ごせない。

小沢一郎氏は「まるで北朝鮮や中国のようだ」と評したそうだが、私はまっしぐらに突っ走って行った戦前の風潮を思い出し、寒気がした。小泉進次郎氏は「思わず自分も起立したけど、あれはやっぱりおかしいですよね！」と語っていたが、こういうのを同調圧力というのだろうか。

戦時中は「バンザイ！バンザイ！」と叫んで若者たちを次々と戦地へ送り出した。みんなが日の丸を振って、声を揃えて‥‥。同じ行動ができないものは、非国民と非難され、国賊と罵倒され、日常の暮らしができないまでに追い込まれた。私は、当時国民学校児童として、その進行と終焉と名残をしっかり刻み付けている。

枯葉は風に逆らわず，ヒラヒラと舞う。生きている樹木は風に耐えて立っている。人間は自分の意思で風に乗ることもできるが、風に真っ向から立ち向かって行くこともできる。だが、じっさいにはみんなが歌うときに一人だけ歌わないでいるのは、ちょっとその場に居づらい気持ちになる。みんなが是というときに、自分だけ非というのはそれなりに勇気が要ることがある。

一生徒を退学処分にするかどうかで、校長ら圧倒的多数の教員が「退学」を主張したとき、あくまで「退学は不可」と主張し続けて会議を何時間も紛糾させ、同僚たちの冷たい視線を浴びた経験は数え切れないほどある。そのたびに、「君さえ黙っていれば丸く納まり、もっと早く終わったのに‥‥」と恨まれた。

私学の場合、目の前の上司は直接の使用者であり、生殺与奪の権限を持っているのだから、その都度足が震える思いがした。じっさい当時はあちらこちらの私学で、次々に首切りがおこなわれた。

国会の話に戻ると、少数野党の議員が野次ったり拍手したりするのは愛嬌ですますこともできるが、圧倒的多数の力でなんでも通そうとする与党議員が、いっせいに起立し、拍手し、歓声を挙げるのは脅威である。

あの日の翌朝の朝日新聞に早速掲載された投稿川柳を紹介しておきたい。国民の感性は鋭い！

斜め前　右手上げれば　うりふたつ（大塚　裕）　　よみがえる　兵隊さんの　おかげです（石井　彰）
起立せぬ　議員いずれは　非国民（朝広三猫子）　　万雷の　拍手で送る　死の戦場（横山閲次郎）

みなさんの投稿をお待ちします。もちろん、反論やご意見も大歓迎です。この場が、「交流の広場」となればと思い、その呼び水のつもりで書いています。（田中）

※田中さんの原稿は昨年秋に受け取っていましたが、通信発行日の関係で遅れてしまいました。読者のみなさんの原稿もお待ちしています。

「戦争法」廃止をめざして！　安倍政治にNOを！(9)

みんなで声をあげ、安倍政権を憲法で縛りつけましょう

・２月１９日（日）十六銀行本店前（名鉄岐阜駅前）

戦争法廃止・憲法改悪を許さない　もう黙っとれんアピールアクション

スタンディング　17:00～17:45

・２月１９日（日）　早田ロータリー交差点（7:45～8:15）

島・早田・則武在住有志によるスタンディング

※３月１９日（日）も、同じ場所同じ時刻で行います、掲げるボードは用意（自作歓迎）。

同じ１９日午前中、金公園で集会・デモ（金公園→岐阜駅前→金公園）の予定です。

・毎月９のつく日(19日以外)　岐阜・九条の会　街頭宣伝活動、名鉄岐阜駅前（16:30～17:15ごろ）

軍国少年だった 鈴木瑞穂さんと九条

十二月三日、岐阜市の「日光コミュニティセンター」で俳優の鈴木瑞穂さんの講演があった。約一五〇人の参加者が熱心に聴いた。

ギターを持った湯上さんの平和の「うたごえ」で始まり『上を向いて歩こう』『ともだち』『私を褒めて下さい』を口ずさみ、田中良さんの挨拶が述べられた。《東北の震災で避難した子供が、戻れない惨状なのに残酷なタカリやいじめに会う事件。施設の障害者を殺し抹殺する事件。前石原知事の「障害者の人は生きている意味があるのでしょうか？」の感想や麻生さんの「ナチスの例を見習ったらどうか」の発言がある。一方、安倍さんは強行採決した「戦争法案」の「駆けつけ警護」で南スーダンに武器を携行した自衛隊を派遣した。高齢者も、年金の切り下げや介護の負担増で、権力者が率先して『弱いものいじめ』をしている。「憲法改正」では、個人の尊重が公共の秩序の重視と変えられるような『天下分け目の事態』だ。校区ごとに立ち上げた「九条の会」の会の十周年記念として、劇団の田村さんの伝手で、八九才の今も現役の俳優である鈴木瑞穂さんを呼べました。》

鈴木さんは足取りも軽く出て来て話を始められた。流石に俳優だけに、言葉が溢れて来るように自分の体験を語られ、演劇のような世界に入り込んでいけた。

《私の父は、北朝鮮の小学校長で百人余りの学校でした。そこに生まれた私は、「サイタサイタ、サクラガサイタ」から「ススメススメ、ヘイタイススメ」と国語の本が変わった頃の教育を受けて育ちました。

私の家に、朝鮮の女中さんがいて姉さんのように慕っていたが、見下げた意識もあり、創氏改名の時も当然だと思っていました。

「四人の軍神」の話を聞いては、憧れたものです。自分をかまわず部下を助けた広瀬中佐や、白瀬中尉、死んでもラッパ（豆腐屋のような簡単な物）を離さなかった木口小平、死をも恐れず敵地に突撃した肉弾三勇士が、心躍る「修身」の内容でした。また、四つの大節があり、いつも奉安殿の中から校長先生が、厳かに「教育勅語」を出して来て「朕思うに高祖高宗、親に孝行、兄弟仲良く、夫婦相和し、・・一旦、緩急あれば、義勇公に奉し、もって無窮の幸運を不朽すべし」と一字一句間違えないように読まれ三〇分以上も最敬礼で聞いていました。校長も読み間違えると首でした。「日本の国体の特性から、私は徳を以て臣民を治める。一億の心を一つにして、戦争があれば、滅私奉公しなさい」と言う意味でした。

一九四〇年に「中国（チャンコロ）は、一、二年で蹴散らす」と攻め込んだのに泥沼状態に陥ったので、活を入れるために「皇紀二六〇〇年」のお祭り騒ぎをやりました。一九四一年には、無謀な真珠湾攻撃を起こし、初めて天皇が「宣戦布告」をしました。「海ゆかば」の曲が流れ、アナウンサーが「米英と交戦状態に入れり、殲滅的攻撃を与えたり」と大々的に報じました。中学二年の時、寄宿舎の食堂で聞きました。その時、英語の先生が「えらいことになった」と呟いたのを「非国民だ」と思ったものです。

時局が悪くなると、体育の時間は、軍事教練ばかりになりました。古い三八式銃を貰い下げ、分列行進や銃剣術で藁人形を突き刺す訓練をやり、本物の銃でも心臓の刺突訓練をやらされました。力づくで突くのは怖い思いでした。甲の成績を取らないと進学は出来ませんでした。

理数英中国語が、甲だったので「陸軍士官学校へ行け」と言われたが、血なまぐさい陸軍よりも相手を目の前で殺さない海軍を選んで受けました。陸軍は三日間で終了。海軍は四日間かかり二五〇名余りが、五〇人に絞られ、口頭試問で中佐に「太平洋を見て戦果をあげたい」と答えました。

その頃、山本五十六司令官がソロモン沖で戦死し、日本は怪しい雰囲気になりました。多くの兵隊が死んでも「転進」「戦略的撤退」と言われ真実は隠された。当時の白瀬校長は、ドイツとの「三国同盟」に三人が反対意見を出した事を伝え

「ジェントルマンの気概を持て」と話した事を覚えている。私は「回天」に乗る決意で訓練を受けていた。

八月六日の江田島は、蝉の泣く快晴だった。八時頃、B29が飛んで行き、電信機をつけていたら、ドーンと地揺れがし、広島に「新型爆弾」が落ちたと聞かされた。大本営は「異常なし」と発表した。水兵がカッターに乾パンや消毒液を積んで出かけたが戻って来た。広島湾は人間の死体で一杯で進めずに戻って来たのだ。バラバラと生活した物が落ちてきた。「雨に打たれるな」とも言われた。宇品港に行くと男か女か分からない死体が浮かんでいた。「人間がこんなにも人を貶めるものか、戦争は生半可なものか」と疑問を持った。

八月一五日の「玉音放送」を聞いたが、意味が分からず教官が日本は負けたと言われた。一億総玉砕と思ったが、「天皇の大御心は日本の再建である」との言葉で思い直し、軍隊の解散で、すし詰めの列車に乗り復員した。広島から列車に乗り東北の陸前高田までの間、沿線の都市は、空襲で焼け野原だったが京都だけは灯りが点いていた。叔父の家で暗い顔で釣り等をして過ごしていた。

戦前に「鬼畜米英」と叫んでいた岸は、「民主主義の国」を唱えていたので、誰も信用できないと思った。叔父さんが「大学でも行ったらどうや」と勧めてくれたので、京都の大学に入った。バイトしながらの生活だった。

五月に出された「憲法草案」を十月に読み始めたら、分かり易く「電気ショック」を受けた。九条のところまで来たら涙が出てきた。特攻機に乗る若者が、無表情で「行きます」と言って沖縄の海に散った顔が浮かんできた。河上肇の「貧乏物語」を読んで、死ぬ人の裏に戦争で儲ける者がいるんだと分かった。人間の価値は、ソロバンで儲かるかではなく世を治め民を救う「経世済民」だと確信した。

ある時、友達から貰ったチケットでチェーホフの「カモメ」を観て涙が出てきた。人間の喜怒哀楽を素晴らしく表していたからだ。見事に死のうと思い、貧しさの原因を感じていた心を揺り動かされた。楽屋に行ったら、宇野重吉さんに「あんちゃん、どうだった。芝居をやってみないかい」と言われ試験を受けて演劇の世界に入った。「民芸」に入り仲間と共に歩んできた。「どん底」では「人間のこの素晴らしい世界に祝福を!」の台詞にほれ込んだ。

「憲法とは・・・」の映画では、吉田茂役をやり「日本国憲法」は、押し付けられたのではなく、中江兆民、田中正造、幸徳秋水等の民主主義の流れを引き継いでいます。「憲法研究会」の鈴木安蔵、幣原喜重郎らの苦労の跡を受け継いだものので、押しつけられたものではありません。

また、七〇年も経って古いと言うなら、セルバンテスの「ドン・キホーテ」では、年取った老いぼれが夢を見て風車に挑むが「夢を現実に近づけることが大切なのではないか」と思う。

この憲法は、どこの国へ出しても素晴らしいものだ。ドイツのヴァイツゼッカー首相は、「過去を忘れた者は、未来を誤る。過去から学ぶ必要がある」と述べている。私の生き方は、敗戦と原爆。九条が人生だった。だから、九条を、一つ一つ話し合って広めて行きたい。》と熱っぽく話された。

その後、質疑が行われた。「最も印象に残っている劇は?」との質問には「アーサー・ミラーの『るつぼ』です。アメリカで赤狩りが行われた時に、死罪を恐れずに語った言葉を今でも覚えている。わたしの一人立ちの出発点でもあります。また、宇野重吉さんの『思い出のチェーホフ』です。彼は、奴隷出身で複線的な人間観をもって描いています。」と話された。「台詞を覚えるコツは?」に、「内容で覚える、百遍でも読むことでしょうか」と。

昭和天皇の戦争責任には、「少なくとも、終戦の時に責任を取って退位すべきだったと思う。高松宮は、京都の旧家にすべきと言われた」と体験から話された。

「特攻は犬死と言う意見は?」には「苦しみながら追い込まれて死を選んだ。その道しかなかった。そんな時代にしてはいけない」と慎重に話された。「加害体験を話すことは?」に「自分からは、中々難しいでしょう」と答えられた。最後は大きな拍手で終わり、サイン会が行われた。

(岡崎行雄)